

記述されていない言語の 文法を書くには

ニコラス・エヴァンズ

(翻訳：稲垣 和也)

1 はじめに

この場にお招きいただき、そしてこのセミナーを開催していただき、とても感謝しています。ここで扱うトピックは長田先生と大西先生から指示してもらいました。ただ、正直言って、少し心配しているのは、このタイトルで話をするのが実は10年かけても無理だろうということです。この難題をたった数時間でお話しできるかどうか不安なのです。ただし、そのぶん意欲をかき立てられる難題であるとも言えます。しかし、私の話はたぶん不十分に終わることが目に見えていますから、話が終われば皆さんはがっかりして退室なさることでしょう。それでもとにかく、今はベストを尽くしてみて、いくつかのトピックに触れていこうと思います。それぞれの言語には固有の問題があって、たった1つの一般的な解決法が存在するというわけではないですから。^{*1}

文法を書くにあたって最も難しいのは、言語を包括的に扱うことです。言語学者はたいいてい特定のトピックについて記述していきます。皆さんが言語学者ならそのやり方は御存知だと思います。しかし、大きな文法を書くとなると、たくさん問題が出てきます。私の先生であるボブ・ディクソン (Bob Dixon) が、「良い文法を書くということは、言語学者が直面する最大の知的難問だろう」と言ったのは実に正しかったと思います。私は、オーストラリア国立大学 (ANU) の学生だったころ、ほとんどの博士課程の大学院生は学位のために文法を書くだらうと思っていました。しかし、このことは言語研究の世界において一般的ではありません。例えば、北アメリカの多くの大学では、文法を書くということ自体、なし得るトピックではありませんし、「理論が無いね。そんなことをしても無駄だ。それはただの記述だ」といった返答が返ってくるでしょう。それは途方もなく認識の甘い、間違った見方だと私は思っています。文法を書くという課題は、博士課程の学生に用意する目標として壮大で適確なものだと思いますが、言語学にたずさわる者であればどの段階であってもできる事だとも思っています。

^{*1} この考え方をよりフォーマルに説明したものとしては、Evans & Dench (2006) を参照。

さて、話をする前に少し「パーニ二賞 (Pāṇini Award)」について述べておきたいと思います。これは言語類型論学会 (Association for Linguistic Typology) で私達が決めた 2 つの賞のうちの 1 つで、言語学における文法記述とそれに対する認識を促進し、文法記述の分野における功績を称えるためのものです。第一回のパーニ二賞は昨年でした。今後は 4 年ごとに選考がおこなわれます。あまり知られていない言語の記述をおこなった博士論文のうち、最も優れた論文に与えられます。応募された文法書を読んで評価するメンバーをこちらで選任できる限り、執筆言語は (ある程度知られた言語のうち) どの言語であってもかまいません。昨年は、世界のさまざまな土地の言語をさまざまな出身の人が記述した文法書が 9 つ応募されました。受賞者はペイシャンス・エップス (Patience Epps) という研究者で、受賞論文は、フブ語 (Hup) と呼ばれるアマゾンの言語について書いた、バージニア大学博士学位論文でした。

2 つの賞は、どちらも 4 年ごとに応募期間があり、オリンピックのように、過去 4 年間で書かれた文法書が対象になります。長田先生がおっしゃったように、夏季と冬季のオリンピックのようなものです。例えば、夏季オリンピックは博士課程の学生のためのパーニ二賞、冬季オリンピックにあたる賞は過去 4 年間に出版された最も優れた文法書に対して贈られます。これがゲオルグ・フォン・デア・ガーベレンツ賞 (Georg von der Gabelentz Award) です。この賞は次に予定されているもので、2009 年のバークレイでの言語類型論学会で授与することになっています。みなさんが出版した文法書をその賞に応募するのを期待しています。あなたがたなら可能です。千田さん、みなさん、すぐさま動き始めなければなりません。これについてはよく考えておいてください。ちなみに、賞金は無いのですが、航空運賃と会議で正式に講演する栄誉が与えられます。また、大手の出版社から文法書の山を贈られ、数々の素晴らしい文法書で本棚がうまることになります。あなたが真の文法家なら、これは、頭にたくさんの言語をつめこむ以上に、望みうる最も素晴らしいものになるでしょう。

2 目標：完璧な文法とはどのようなものか？

それでは、いくつかのトピックにうつりましょう。既に述べましたが、これは私にとって怖気づいてしまう作業ではあります。どうやって文法を書くのでしょうか？ 厄介なのは、誰もが独自の方法を持っている、あるいは方法を持っていないということです。私は自分が文法を書くための方法を持っているとは思いません。私の書き方はあまり体系的でなく、整理されていませんし、たくさんの物事をつめこんでしまうからです。そのた

め、ここでは文法の書き方について多くを語るつもりはありません。^{*2} 文法の書き方ではなく、完璧な文法とはどういうものなのかということ述べる方が少しは容易です。それで、少なくとも私達のゴールは見えてきます。ただし、そのゴールにどうやって到達するかということは、より難しい問題でしょう。

「理想的な文法」という考えは、最適性理論 (Optimality Theory) 風に言いあらわすのが良いでしょう。つまり、文法を書くことにはたくさんの違反可能な制約があって、これら全てを相互に両立できるわけではないけれども、できる限り制約の違反を少なくしようというものです。1つの文法の中でそれらを全て満たすことはできないので、皆が認めるようないくつかの理想に分けて考えていくことにしましょう。それは、時代や学派が異なるごとに現れてきた理想でもあります。

2.1 パーニニ派の理想

「言語学」においておそらく最も初期のものと思われる理想から始めることにしましょう。ここではそれを「パーニニ派の理想」と呼んでおきます。この理想はアシュターディーヤーイー (Aṣṭādhyāyī) の中で具体化されています。

第1の理想は、明白性 (explicitness) です。言語学者は、言語学の授業を受け始めたその日から、明白性の大切さを教えこまれると思います。それは、規則にも、我々が使う記述用語にもあてはまることです。「名詞」「名詞句」「非現実」など、我々が記述上の範疇等に対して使う用語は明白に述べられる必要があるのです。これは私の考えですが、言語学における特定の学派の生成言語学は、明白性が自分たちの知的専有物であるかのように主張してきました。そのようなアプローチには一応もっともな理由と長所があるわけですが、それは明白性に対する1つの見解にすぎません。他にも明白性に対する多くの見解があります。このトピックについてここでは更には言及しませんが、また後で取り上げることができでしょう。

第2の理想は、簡潔性 (brevity) ですが、この理想をここで述べるのはあまり気が進みません。というのは、私の書いた文法書は両方とも気軽に持ち運ぶことができないほど大きいからです。つまり、私の書き方は明らかに簡潔性の理想に違反しているのです。文法書を読んだことのある人は、文法書をくまなく読むために、ページ数が少ないことを望むことでしょう。しかし、もちろんこれは1つの理想にすぎません。なぜ簡潔性に違反してしまうかということ、我々には言語の全てを記述する必要がある、すなわち網羅性 (exhaustiveness) が原因なのです。よって、簡潔性と網羅性の2つは互いに抵触し合いま

^{*2} 実際的で有用な報告については Weber (2005) を参照。

す。しかし、文法家としては、書いたものは理解されたいはずで、パー二の文法は、読んですぐ理解できないかわりに簡潔性を満たしています。それはとても複雑な暗号化アルゴリズムを含んでいて、すぐには読めないものになっているのです。それを読み込むには注釈や他の多くの解説を読む必要がでてきますが、これは文法家たちが直面する問題の1つとなっています。例えば、1つの事柄をあえて繰り返して述べるでしょうか。従来の理想は、「どの記述も二回述べられるべきではない」です。しかし、読み手は生身の人間なので、いくつかの事柄はときには二回述べられたり、呼び起こされたりしなければなりません。読み手により多くの前提知識を要求すれば、書き方をより簡潔にできます。しかし、要求される前提知識を持たない読み手にとって、その書き方はより一層難しいと感じられてしまいます。だから、簡潔性というのは1つの理想にすぎず、その理想にぴったり合わせられない場合もあるというわけなんです。

次の理想は、エレガントな構成 (architectural elegance) です。これはおそらく最も重要で、そして最も難しい事柄でしょう。というのは、言語学の授業を受け始めると、さっき述べた明白性や簡潔性について教えられます。例えば、音韻論の宿題を提出すると、それに点数がつけられます。ある言語現象に対して生徒 A は3つの規則を書き、生徒 B は2つの規則を書きますが、Bの方がエレガントとみなされて高い点数をとります。この種の課題をおこなう訓練を初めから受けるのです。これはかなり照準を絞ったやり方です。文法記述に話をうつすと、合理的な文法書を書くには、何千もの規則を書き、さらにそれらを体系づけなければならず、とても大変です。私は「全ての言語に対して、そして全ての目的に対して、うまく働くような単一のシステムは無い」という信念を持っています。文法の記述は弦楽四重奏曲に似ていますが、その際に最も多く目にするのは単独の問題だと思います。その中で形式と取り組むのですが、決して満足できるわけではないでしょう。そして、そういった問題を文法書の中のどこに配置すれば良いかわからなくても、文法を書いていけるというのは、実に書くレベルにおける現実問題の1つです。例えば、ある種の屈折とか構文について1つの段落を割くわけですが、その段落と文法全体がどのように関連しているか確信が無い、といった場合が出てきます。このとき、1つのより大きな構造を記述つもりでいても、自分がうまく文法事項をまとめているのかどうか確信が持てないままになるのです。これを回避するため、文法を書く者はなんらかの一般原則を設けなければなりません。その原則は、メタ言語を区別する方法とか、一般的な用語を設ける方法とか、セクション間での相互参照の方法といったもので、絶えず取り組む必要のある問題です。しかし、全体的に見たときの構成は、古典的なイントロダクション、音声学、音韻論、形態音素論、形態論、統語論、索引といったものになるでしょうか。そして、もちろんその構成の中に他の事柄を加えることもあるでしょう。しかし、それが最良の方法

というわけではありません。自分が言語を習ったり読んだりするときのことを考えてみてください。この部屋に集まった皆さんのうち、1 ページ目から 999 ページ目まで、正確にその順序通りに文法書を読んだことのある人はいますか？ これは不可能なこと、あるいはかなり難しいことです。だから、順序通りに読むことが想定されるような普通の本を書くことと、文法を書くこととは全く別なのです。そのため、これらの問題は今のハイパーテキスト時代において解決していくものだ、と皆が言います。しかし、それは完璧な解決にはならないと思います。なぜなら、ハイパーテキストがあっても、全ての記述間の一貫性を知る必要があるからです。少なくとも線状順序にしたがっているのなら、全ての事柄をくまなく調べて一貫性をチェックすることができるでしょう。しかし、その順序の管理を怠るとすぐさま一貫性のチェックはできなくなってしまいます。

以上、ここでは「パーニニ派の理想」の中の 3 つを挙げました。パーニニについて、そしてそれを理解するための全習法は、自分で学ぶことができます。言語学では、パーニニの文法が依然として今までに書かれた最良の文法なのだとあたりまえのように言われています。確かにこれはある意味では正しいのですが、別の意味では誤解を招く恐れがあると思います。というのは、記述されていない言語の文法を、パーニニの文法と同じように書けるとは思えないからです。注釈にしてもよいような言語の知識が既にたくさんあったので、パーニニのような記述ができたのだと思います。

2.2 構造主義者の理想

それでは、2 つ目の理想、すなわち私が大雑把に「構造主義者の理想」と呼んでいるものにうつりたいと思います。ここではヨーロッパの構造主義者の伝統とアメリカの構造主義者の伝統を含むことにしています。

まずは「言語にそなわった特質 (distinctive genius)」を重んじるのですが、この特質からは、ボアズ (Boas)、サピア (Sapir)、ウォーフ (Whorf、文法記述者として) が連想されます。とても刺激的な類の理想です。それは、新たな言語の最も興味深い部分のことで、そこには、他とは全く違った、新しい・珍しい事象があります。そのため、既に自分が書いてきた文法にもその知見を取り入れたいと考えるはずですが、文法をうまく書くにはそのようにするべきだと思います。ただし、あまりにこの方向へ進みすぎると論理的な合理性を欠いてしまい、とても読み辛いものになりかねません。このような結果をまねく原因は、全ての範疇が違って見えるからです。例えば、ある言語では「名詞が無くて何か他のものがある」と言ったり、「過去時制が無くて何か他のものがある」とか、「名詞句が無くて何か他のものがある」と言ったりするかもしれません。通常これらの範疇については、調べている言語が、よく知られた英語・日本語などの言語と比べて、どう違っているの

か、はっきりしめすことが可能です。では、特定の範疇に対して新たなラベルをつけるには、どんな点において十分に異なっていればいいのでしょうか？ これは判断に関する問題で、さまざまな言語に精通していることが要求されます。ベンジャミン・リー・ウォーフ (Benjamin Lee Whorf) によるホピ語 (Hopi) の文法書は、^{*3} まさに「言語にそなわった特質」を描写しようとした最良の例でしょう。それは興味深い例と言えるのですが、たくさんの事柄を風変りに見せるという罪を犯してしまっています。馴染みの深い事柄であっても、彼は「完全に異なる」と主張していて、おまけに例示も無いので、ますます難しくなっているのです。このため、その文法書を本当に使いこなすことはできないでしょう。しかし、確かにホピ語はある種の珍しい特徴を持っています。ただ、1つ1つをユニークな事柄として提示するなら、ページを切らずにその文法書を出版するのも同然です。なぜなら、誰もそれを読んだり理解したりできなくなるからです。そのため、ここではバランスをとる必要があります。おそらく、半ダース、あるいは1ダース、あるいは2ダースほどの特徴は本当に違っているでしょう。他の特徴については、言語学における共通の用語を使えるので、馴染みの用語を使って馴染みの無い事柄を強調することが可能です。これはバランスの問題で、たった2つの言語しか知らないような場合にはなし得ないことです。研究の対象としている言語と自分の母語だけを知っているような場合、その2つの言語はかなり違って見えるでしょう。研究対象の言語について本当に何が特別なのかを見るには、その言語から離れ、広範囲の言語について学ばなければなりません。良い文法とは、このようにして書かれていて、「言語にそなわった特質」がしめされているものなのです。

構造主義者の理想の2番目は、「一体系としての文法 (grammar-as-a-system)」です。文法は、規則のカatalogでも、規則の一覧でもありません。文法とは全ての規則が相互作用する体系として組織化されたものです。音韻論に根ざしている1つの規則が、統語論における別の規則を決定的することもあります。文法を書くとき、これら相互の関連性について常に考えていなければなりません。それは非常に緻密で相互関連の深い作業なのです。1つ例を挙げましょう。チチェワ語 (Chichewa) についてジョアン・ブレスナン (Joan Bresnan) とサム・ムチョンボ (Sam Mchombo) が書いた古典的な論文があります。これは、チチェワ語における話題 (topic) と目的語の一致 (agreement) 現象について論じていて、この言語の主語の一致が目的語の一致とかなり違った位置付けにあることをしめています。その決定的な証拠は、統語的構成素をまたぐ音調上の特徴^{*4} です。したがって、

^{*3} Whorf (1946)。Hill (2006) の中の議論を参照。

^{*4} ここでは、「音調上の特徴」= “tone sandhi”

チチェワ語の文法を書くには、音韻論の章の中で音調を扱う部分を十分に記述し、それに関わる統語的構成素を記述してから、両者を結び付ける必要があります。大げさかもしれませんが、全ての記述は他の全ての記述に影響をあたえます。そのため、まずは多少ごちゃまぜに記述することになります。それがどのようなものなのか前もってはわからない書き方になるのです。よい文法家なら、それらの間の関連性を見抜くことができ、全ての記述は他の全ての記述と関連している、とまでは思わないでしょう。関連しているものも関連していないものもたくさんあり、それを発見すること、すなわち説明することが問題となります。同時に、事柄同士の結び付きを解説することも問題となります。それは、主に規則とか範疇といった事柄の間に見られる相互作用のことです。

次は、構造主義者の理想の3番目です。例えば、ある言語を記述しているときに、特定の範疇ないしラベル等に対する当該言語の中での理由づけ (**language-internal justification**) が必要になるでしょう。新たな範疇を指す造語を考えなければならないような場合もあります。例えば、その言語には特定の語類 (word class) があって、そのような語類を持つ言語が報告されていないような場合です。マヤ諸語などに見られる「位置詞」のようなものの場合、それを記述するために不思議なネーミングをおこなうこととなります。ただし、このような場合でも、実は名詞 (noun) とか形容詞 (adjective) といった標準的な範疇の変異を扱っているに過ぎないというケースがほとんどです。しかし、それを当然のこととして、すなわち、皆が名詞の定義を完全に知っているかのような記述はできません。このような場合は、その言語特有の基準を提示して下さい。その基準をしめすこと自体は、範疇やラベルなどの定義の仕方を説明するという、自らの仕事にあたります。また、それらを適用可能にする方法、つまり名詞とか形容詞であることを識別する方法も確定する必要があります。そこで、「テストをおこなう」ことになるのです。範疇や句構造や規則などの全てを決めるために「テストをおこなう」のは、おそらく構造主義者の理想と生成主義者の理想の間にある着想でしょう。文法書を注意深く読んでいる読み手が、読むのに飽きてデータを独自に分析していただくことを考えてみてください。そこで「テスト」がおこなわれておらず、文法書の記述をただ単に信頼させるだけなら、やるべき仕事は完遂されていません。ただ、言語特有の「テスト」を作り出すことが言語科学の進歩につながるという点については、それほど一般に注目されていません。生成統語論 (generative syntax) を50年代のものから読んでいくと、そこにはおおむね「テスト」の歴史を構築できるでしょう。主語を同定する方法をどうやって学んだのでしょうか？ 特殊な節の同定方法をどうやって学習するのでしょうか？ 等です。しかし、新しい言語を学習し始めるときは毎回、基本的に自分1人で何もかもやらなければなりませんね。「テスト」は、他の言語における既成の事柄を取り出せるようなものである必要はありません。

4 番目の構造主義者の理想は、1 つの文法がそれだけで完結したものではないとする見方です。文法は、「文法 + テキスト + 辞書」という、より大きな一組の記述、すなわち「ボアズ 3 作」(‘Boasian trilogy’) の中に組み込まれたものです。そして、文法とテキストと辞書の 3 者は互いに関連していて、ある意味で 3 者はお互いにテストの対象となっています。文法とは母語話者の言語知識を捉えたものである (これはチョムスキー派の考え方です) というのは、文法に対するごく標準的な見方です。そして母語話者は自分の言語の文法を読んで、「ここで言われている文法事項をチェックするため、文を 1 つ作ってみよう！」と考えることでしょう。しかし、あまり知られていない言語を記述しているなら、そんなふうにはできません。この場合はコーパスを中心とした元々の見方に立ち返らなければならないでしょう。コーパス内の全文を解説するような文法を書こうと試みるわけですね (1 つの文法の中では不可能ですが)。テキスト集 (text collection) でおこなうわけです。文法項目をテストするための基盤として、コーパスがあり、テキスト集があるわけです。ただ、「よし、文法を見るぞ。テキスト集も見よう。そしてこの文法がコーパス内の全ての事柄を実際に解説しているかどうかチェックしよう。」と言って言語記述に対して全コーパスを本当に調べた人というのは、私は見たことがありません。

[会場：歴史言語学では全ての事柄を見ることがありますが...]

ええ。歴史言語学ではその通りです。歴史言語学におけるコーパスというのは閉じていますから、安心して全てを見ることができるとおもいます。しかし、フィールド言語学者の場合、「コーパスを構築するか？」あるいは「文法を構築するか？」ということを常に決めていかねばなりません。人生には限りがあり、両方ともを構築し尽くすことはできません。両方の間を行ったり来たりするだけです。構築し終わることはないでしょう。

それでは、ボアズ 3 作の中に文法がどう収まるのかという問題に戻ることにしましょう。オーストラリアの文法家の伝統の中で、ジェフリー・ヒース (Jeffrey Heath) がボブ・ディクソンと見解の上で対立していました。ディクソンによって 1970 年代に世に出されたジルバル語 (Dyirbal) とイディン語 (Yidiny) の文法書は、御存知のようにたいへん重要な素晴らしい文法書です。それらは、私自身を含む多くの人をフィールド言語学へといざなった決定的な文法書です。それぞれの文法書はボアズ 3 作の中の第 1 ステップです。ただ、まだジルバル語の辞書は出ていませんし、本当の意味ではテキスト集もありません。ジルバル語文法の末尾に 3 つか 4 つのテキストが付けられていますが、十分な量ではありません。そして、ジェフリー・ヒースはこれと正反対の順序で取り組もうと考えました。彼は、ヌングブユ語 (Nunggubuyu) の文法書の中で、「まず私は小さめの辞書を出版し、次に辞書をチェックできるようにテキスト集を出版し、それから文法を出版しよう。コーパスの中で実証されない事柄は、文法につめこまないといいな。」と述べました。1984

年の『ヌングブユ語機能文法』(*Functional Grammar of Nunggubuyu*)は、とても興味深いのですが、極めて使いにくい代物です。ページ全部が「さらなる例については～を参照せよ」といった相互参照にあてられている場合もあり、それはある種のハイパーテキスト(= 関連情報を次々に表示させていく仕組みをもつ文書)以前のハイパーテキストと言えます。1 ページ半くらいはテキスト集を参照した番号を読むことになります。これは少なくとも実践されたやり方だということを念頭におくと、この方法も1つの理想だと言えるでしょう。人の死とか、一生のうちに2つ以上の言語を記述する必要があったりとか、たくさんの事情がその理想の実現を妨げることになるかもしれませんが、この方法を理想と考えておいて損は無いでしょう。

[会場：彼の文法をちゃんと読んだことはありませんが、彼は全ての例をテキストから挙げているのですか？]

少しばかりごまかしている部分があります。なぜなら、複雑なパラダイムを持っているような言語では、いくつかの組み合わせを得るまで、際限無くコーパスを構築していかなければならないからです。彼はテンス・アスペクト・ムードの屈折、主語および目的語の接頭辞の完全なパラダイムとか、その他の事柄の実例を得る際にいくつかごまかしをしました。しかし、他の例はほぼ全てがコーパスからのものでした。

個人的な経験から言うと、私がカヤディルド文法を書いているときのことで、ヒースの見解は極めて説得力のあるものでしたから、私も文法を書くときにそれを実践しようと考えました。しかし、カヤディルド語に見られる興味深い構文の多くが実際にはコーパス内に現れなかったため、ヒースのやり方で記述していくのは思いとどまりました。それらの構文は放っておくにはもったいないほど興味深く、文法の中に入れていなんてとんでもない、と思ったのです。結局、文法にはそれらの構文を入れました。そうして、このことがコーパスにつきまとう1つの問題だと気付いたのです。それらの構文は、母語話者から誘出したことは全くなく、直に聞いたことがあったし、出てきたのも確信しています。しかし、項や何かとの特別な相互作用の中で現れました。そういう場合、それらの構文は、単独では記述することができない、とよく言われます。記述できるかもしれませんが、普通はしないはずです。私は、それらの構文は原理的にはコーパスに現れるだろうということに気付きました。しかし、それらの構文をコーパスから持って来るには、かなり注意深く設計され、バランスのとれたコーパスを得る必要があるでしょう。全てのデータを説明でき、かつ全てに対して一貫性をもたせるという問題がそこにはあります。たいてい文法とテキストと辞書は別々の時期にできあがるので、例えば、「この言語には形容詞が無い」と文法書で書いてあるにもかかわらず、辞書の中の項目に「形容詞」というラベルが貼ってある、といった状況に陥りやすいと思います。文法を書いてから辞書を作り始

めるまでの間に5年のブランクがあれば、著者はそれなりに考えを変えてしまうのです。それでも文法の内容を変えないままにしまってはしようもありません。文法と辞書の間で矛盾する事柄を作ってしまうこととなります。しかし、いったん矛盾する事柄を提示してしまえば、少なくとも他の学者がその矛盾をどうやって調整すべきか決めることができるでしょう。

ここで述べてきたようなことが、私の言う構造主義者の理想にあたります。

2.3 生成主義者の理想

それでは、私が「生成主義者の理想」と呼ぶものにうつりたいと思います。生成主義者をここで取り上げるのは少し場違いかもしれませんが。なぜなら、私は生成主義の伝統が文法記述に大きく寄与してきたとは思っていないからです。生成主義が一般言語学に大きく寄与したのは事実ですが、しかし、生成主義にはいくつかの誤った前提があるのです。私が一番問題だと思うのは、チョムスキー (Chomsky) が文法記述の難しさを過小評価したことです。彼は、数ある文法の中から良い文法を選ぶにはこれこれの測定基準が必要だと言いました。しかし、ふつうはいくつもあるわけではないし、1つも文法がないことだってあるのです。だから、文法を選ぶことをどうして心配する必要があるのでしょうか。まったく奇妙な話です。それはともかく、私は生成主義者の理想の中にはいくつかの重要な点があると考えています。1つ目は、言語の持つ再帰特性 (**recursive nature**) を認めたことです。これはもちろん統語論にとって特に重要なのですが、音韻論にとっても極めて重要です。例えば、音調の変異を調べているとき、ある音調規則を検証するためには、さまざまな音調のかなりの数の組み合わせを調べなければなりません。つまり、コーパスだけに頼るのは不可能ということですね。コーパスから抜け出て、複雑な組み合わせを可能にする明確なモデルを築かなければなりません。そしてそこから生じる問題を積極的に追究していかなければなりません。私は今、理想を述べることから実践を述べる方向へと逆を辿っているのですが、実は、分析と記述は同時になされなければならないのです。なぜなら、何かを記述しようとするまさにその瞬間に、自分の理解が不適切で、手に入れなければならない重大なデータを見落していたことに気付くというのが常だからです。研究者は生成主義のおかげで数多くの複雑な相互作用を観察し、訓練を積むことができます。それによって、複雑な相互作用を、非形式主義的な理論では考えられないくらいエレガントにモデル化できる形式主義的視点が得られるでしょう。生成主義は、数学的表記法のようなものを提供してくれるのです。数学的表記法の体系は、複雑に入り組んだ数学の問題を解くのに欠かせませんね。それは、より広い範囲の問題を扱えるようにする道具なんです。

もう第2の重要な点の話に入っているんですが、それは規則どうしの相互作用を検証するための形式的な正確さ (formal precision) です。これは、おそらく文法記述というよりは計算言語学の領域に入るものでしょう。「わかった、君の文法には 1251 個の規則があるんだね。それらすべてに一貫性があるかい？ 相互作用はちゃんとしているだろうね？ すべての規則を適用したとき、こうした奇妙な文が生成されるということにならないだろうね？」。出版された文法書の多くはこうした形式的な問いをおこなうプロセスを経ていないと思います。記述文法家は非形式的に検証して規則を見いだそうとするのがふつうです。われわれの脳は小さいので、実際にコンピュータがやるような形式的プロセスを経ることができないのです。パーニニの場合でさえそうです。後代の人間は、彼が考えつかなかった相互作用を見つけ、それを修正したのです。

2.4 類型論者の理想

さて今度は、類型論者の理想について話すことにしましょう。ここでは、書き手というよりは読み手の視点から考えていきます。これは、書き手と読み手の役割の間を往き来することによってはじめて、文法の書き手は、読み手が直面するであろう問題に共感することになるからです。絶対に必要なのは、類型論の見地から見た専門用語の一貫性です。言語学はこのことで大きな問題を抱えています。化学の例で考えてみると、国ごとに化合物の名前のつけ方が異なっている状況、例えば H_2O という表記が、アメリカでは H が 2 つあることを意味し、ロシアでは O が 2 つあることを意味するといった状況を想像してみてください。つまり、これが言語学の現状なのです。言語学の中には、標準的と言えるような専門用語があるわけではないのです。ほとんどの言語学者は専門用語について議論することが瑣末で退屈な問題であると考えていて、そんなものはライプツィヒにいるドイツ人がやってくればいい、などと考えていることでしょう。幸いにも、ライプツィヒのマックス・プランク研究所にはそんなドイツ人たちがいるんですよ。でも、これは問題です。「誰が専門用語を管理するのか」「専門用語の用法から外れてよいのはどんな場合か」を決めるという社会的問題です。マックス・プランク研究所の一員であるマーティン・ハスペルマス (Martin Haspelmath) は、これこれ是非現実 (irrealis) と呼ばれる、と決めました。それに賛成できないときはどうするか？ 自分流の語釈を使うとき、それをどこまで押し通すか？ 話題 (topic) とか焦点 (focus) といった用語を使うとき、それは何を意味するのか？ タガログ語 (Tagalog)、ソマリ語 (Somali)、ユカギール語 (Yukaghir)、英語で、「話題」や「焦点」と言った場合、それらは全て同じものでしょうか？ おそらく全く違うもので、実際ほとんど正反対のものを指していることさえあります。ですから、この用語の問題は、1 つの独立した分野として解決していく必要があるのです。問題なのは、ほとんど

の言語学者がこれを退屈で馬鹿げた問題と考えていることです。実は私自身もそう考えることがあるんです。しかし、文法を書く者にとっての第1のステップは、ただそこにあるものの大体の描写をおこなうことであり、さらに、おそらく自分が使用するどの用語にもその言語固有の定義を与える必要があります。それさえうまくいけば、私の考えでは、もし、ある用語の使い方が標準から若干外れていても、それで台無しというわけではありません。なぜなら、どう定義したのかがわかれば、少なくともそれを翻訳することができるからです。しかし、定義がなければ、誰もそれを翻訳することができません。だから、用語は定義する必要があり、類型論の1つの目標は、この1分野として扱うべき大多数の論争の中で、ある種の仲介役を務めることなのです。例えば、「形容詞」は「形容詞」であることをいつからやめるか？全ての言語は形容詞を持っているか？という問いに、ボブ・ディクソンは、1977年には「ノー」と答えましたが、2003年には「イエス」と答えています。形容詞をめぐる2003年の本の序論で、ボブ・ディクソンは、「全ての言語には形容詞がある」と述べました。ところが同じ本の別の章で、ニック・エンフィールド (Nick Enfield) は、「ラオ語には形容詞が無い」と言っています。一体どちらが正しいのでしょうか？まあ、ある意味では、どちらの言い分も正しいのです。彼らは、「形容詞」という言葉を異なる意味で使っているだけです。だから、ここでも必要なのは用語の定義です。別の例を挙げます。アスペクトとは何でしょうか？どの時点でアスペクトでなくなるのでしょうか？例えば、英語の完了アスペクトとして知られている、*I have eaten* 等は、考えれば考えるほど、アスペクトとは何も関係がない、「アスペクト」と呼ばれるべきではない、と思われてきます。しかし、この例は、みなさんがロシア語話者ではなく英語話者なら、アスペクトを説明するために最初に持ち出される例の1つですね。また、音声記号についてはどうでしょうか？みなさんは文法の音声や音韻を扱う章で必ず音声記号を使いますよね。どの時点から別の記号を使うのでしょうか？例えば、私はアボリジニの言語イワイジャ語 (Iwaidja) を研究していますが、弾き音をあらわすのにずっと“r”の記号を使っています。転写に際してこのような記号を使う場合、私はこれを音声記号として用いているのでしょうか？彼らの実際の発音は [ara] なわけで、だから私の同僚であるブルース・バーチ (Bruce Birch) はこう言います。「間違っているよ！きみは ara と書かなきゃいけない。だってそれは弾き音 (r) じゃないか。[ara] なんて発音しないよ。それは顫え音 (r) の発音じゃない」。そうです。これは問題なのです。オーストラリアの言語のどの文法書でも、弾き音に対してこの記号が使われているんです。さらに紛らわしいのは、オーストラリアの言語の実用正書法で「2重の rr」を使っていることです。もちろんこれは別の問題ですが。当然、ブルースは正しいのです。r は音声学的には [r] と書くべきなんです。でも、それでは杓子定規で神経を尖らせすぎのように見えてしまいます。とにかく、こう

いった問題もずっとついてまわるわけです。だからその時々 to 適確な判断を下す必要があります。もちろん正確であることも必要です。

さて、もう少し興味をひきそうな問題にうつります。あまり好まれない言葉ですが、類型論的に考え得るどんなトピックについての質問にも対応できるようにしておくこと (interrogability) です。例えば、アスペクト、定代名詞の中の疑問詞、相互態等々、関心をもっている全てのトピックについて (仮にアスペクトの例をとると)、それがどう機能しているかといったことを、世界の全ての言語、あるいはチベット・ビルマ諸語などについて、調査することを決めたとしましょう。そしてボンゴ・ボンゴ語 (Bongo-bongo) ではアスペクトがどう扱われているか調べたいと思い、ボンゴ・ボンゴ語の文法書を開きます。その文法書をくまなく読む人なんてほとんどいません。理想としては全部読むべきなのですが、一体何人の人が本当にそうするのでしょうか？ ほとんどの人は目次か、索引を見ます。そして文法書の何ページに何が書いてあるとか、あるいは何も書かれていないとかを確かめるのです。驚くべきことに、ある文法を書くのに 10 年もの歳月を費やした人が、大学院生を使ってたった 5 時間で索引をまとめてもらう、などということがしばしばおきるのです。ところが、索引作りというのは、文法を書く中でも最も重要な作業なのです。なぜなら、索引は私たち読者を文法書の中へ導いてくれる手引だからです。文法書に良い索引をつけないのは、アパートを建てながらも、そこに入る鍵を誰にも渡さないのと同じくらい馬鹿げたことです。だから良い入口を作らなければなりません。もちろん、目次がありますし、ハイパーテキストに基づく文法書が増えてきているので、事態は良くなってきています。仮に、類型論の研究者が不定代名詞 (indefinite pronoun) について知りたがっているとしたら、*Who came?* 「誰が来た？」のような疑問文をどう言うのか、*Someone came?* 「誰かが来た？」や *Anyone came?* 「誰か来た？」のような文に出てくる不定代名詞をどうやって使うのかということを知りたがります。文法では正確に言ってどの範囲の意味までカバーすべきなのでしょう？ 例えば英語の *someone* が両義的であるということは周知の事実です。 *Someone comes here from Melbourne every month* 「メルボルンからここに毎月誰か来る」という文は、1 ヶ月ごとに京都に来る人物が 1 人いる、あるいは毎回別の人が毎月メルボルンからやって来る、の 2 つの読みが可能です。ほとんどの文法はそこまで詳しく述べていないか、もしくは行き当たりばったり述べていたりします。というのも、私たちが知りたいのは *someone, something, sometime* といった個々の表現ではなく、全体像なのです。ですから、良い文法書なら、不定代名詞を、疑問とか不定など 15~17 個くらいの下位範疇に分けることでしょう。そして、人、物、時間、原因のような 6~8 個くらいの存在論的範疇に分け、それぞれがどのように表現されるかを提示することでしょう。不定代名詞について書いたマーティン・ハスペルマスの本は、類型

論の研究書としてとても優れていて、10 言語を対象にこれらの範疇についてたいへん興味深い分析を提示しています。彼のおかげで、この本を読んだ文法家は誰もが不定代名詞をカバーすべきだと気付くのですが、その本が書かれる前は、ほとんどの人がこの問題について知りませんでした。ですから、文法書はふつうこの点に関して十分な情報を与えてはくれないのです。ひとたびこういった類型論的研究が発表されれば、それが文法家のカバーすべき基盤の目の一部だということが判明します。同時に、類型論者が未だ体系化していない新しい分野が常に存在しますし、良い文法家はそれを察知してうまくカバーしていることもあるでしょう。

次に取り上げる問題も文法のみと関係することです。現存する文法書のほとんどは形式から機能へと進みます。形式から出発してそれらの形式が何を意味するのか説明するのは、このような進め方にはもっともな理由がたくさんあります。しかし、類型論者は文法書が機能から形式 (**function-to-form**) の方向に進行して欲しいと思っています。「時間をどのように表現するか?」「原因についてどう言うか?」といった具合に。別々の時代に、多くの言語学者が「私は形式から機能の方向で既に文法を書いた。次は機能から形式の方向で文法を書くつもりだ」と言っています。私が ANU の学生だったころ、デヴィッド・ウィルキンズ (David Wilkins)、クリフ・ゴダード (Cliff Goddard) というとても才能のある仲間 2 人が、形式から機能への言語分析で博士論文を書くつもりだと言っていました。当時、クリフ・ゴダードはヤンクンチャチャラ語 (Yankunytjatjara)、デヴィッド・ウィルキンズはアランドラ語 (Aranda) を研究していましたが、結局 2 人とも匙を投げました。「その方向でやれるほどこの言語のことを充分に知っているわけじゃないからね。まず形式から機能への問題をちゃんと整理しなくては」とのことでした。本当にそのように書かれている文法書として、私が知っている唯一の例は、リーチ (Leech) とスヴァルトヴィック (Svartvik) による *A Communicative Grammar of English* (1975) です。日本語文法の中にも、「時制についてどう言うか?」「目的語をどうやって同定するか?」などの意味的な領域を一貫して扱う文法があるかもしれませんね。そしてもちろん、ある言語を話したいなら、それこそ知っておく必要がある事柄です。既に文法があるような言語でさえ、こういった文法を作り出すために第 2 の文法記述がなされるべきでしょう。しかし、そうした文法は実際にはまだ存在していません。それで、この問題を解決するために、さまざまな試みがなされました。そうした試みは興味深いものですが、私はどれも完全に満足できるものとは考えていません。ポール・ニューマン (Paul Newman) によるハウサ語 (Hausa) の文法書を御存知でしょうか。たいへん詳細にわたる文法書です。彼はその文法書を百科事典的文法書と呼びました。辞書のように R のところで relative clause (関係節)、T のところで tense (時制) をひいたりでき、そこに小さな章が置かれています。しかし、もちろ

んそれはハウサ語を記述した最初の文法書ではありません。索引を使うのももう1つの解決策です。先に述べたように、マーティン・ハスペルマスのレズギ語 (Lezgian) の文法書は、索引の使い方をしめした素晴らしい見本です。彼が索引でやったことの1つは、その文法に無い事柄を、有る事柄と同様、索引で示すということでした。特定の言語を調べる時、「ジェンダーについてはどうなっているんだ？」というような事柄を常に念頭に置いているでしょう。その言語がジェンダーを持たないなら、文法書の著者はそれについて一度も言及しないのが普通で、索引にも載りません。そして読者は、「この著者は索引をつくってくれる良い学生に恵まれなかったんだろう...」と考えるでしょう。しかし、少なくとも彼の索引には—どんな記号だったか忘れましたが—、小さなゼロか何かの記号で、「これはこの言語には無い」ということが示されているのです。こうして、これらの存在しない事柄が索引に含まれているのです。それから、ハイパーテキストの使用ですが、これが問題の解決の糸口になればと思います。ハイパーテキストによってたくさんの事をなし得るはずですが、今のところ真に説得力のある例を知りませんが、5年もすればそうした例に出会えるでしょう。この黄色の本 (Ameka *et al.* 2006) 所収のディートマー・ツェフェレル (Dietmar Zaefferer) による論文がそのことについて述べています。それから、もう1つ、私が援用した、とても望ましいとは言えない解決法があります。それは、一貫性を放棄する、というものです。つまり、文法書の一部を形式から機能への視点で記述し、別の部分は機能から形式への視点で記述するというものです。例えば、複合的な節を記述するときに、その形式的特徴について述べて、そしてわざわざその機能に立ち返って副詞節や原因節という形でまとめる、といったやり方です。

2.5 記録主義者の理想

では、記録主義者の理想にうつりましょう。このトピックは比較的最新のものです。こういう人が増えています — 「君は、自分の記述を公に利用できるコーパスの中に位置づけ、検証可能にしなければならない。全部の例文を聞いて、君がそれらを正しく転写したかどうか、どの言語学者にも確認できるようにするべきだ。なぜなら君の耳が悪いかもしれないし、見落としがあるかもしれない」。そうですね。いいことです、より科学的になりましょう！まともな科学なら物事が検証可能でなければなりません！しかし、言うは易しで、全てをおこなうのはおそらく不可能でしょう。例えば、ニック・ティーバーガー (Nick Thieberger) の南エファテ語 (South Efate) の文法書は、この観点から見ると、大変よくできています。検証可能性という点では、今までに書かれた文法書の中で最良のものかもしれませんが、ただし、分析の点では、あまりいいとは言えません。ですから、先に述べたように、一度に全ての理想を満たすことはできないのです。

それから、記録言語学の仕事と記述言語学の仕事は分けておく必要があります。これについては、例えば、ニコラス・ヒンメルマン (Nikolaus Himmelmann) が述べています。伝統的に、記述言語学者は、記述と記録を同等とみなしてきました。ヒンメルマンの主張は、その言語に関わる何もかもが得られるようにすべきだと言うのです。そうすれば、今日から宇宙の終わりに至るまで、いつでも、誰もが、その言語を分析することができるというわけです。そうした記録があってはじめて、言語学者は独自の記述が可能になるのですが、それが決定版というわけではないということも認識すべきだと言うのです。さて、この立場の難点は、個々の分析から生じるさまざまな問題に答えていくというやり方がうまくあてはまらない点です。私は、文法記述とは、出版社に原稿を送る前日ですえ、突然、そこに答えるべき別の問題があることに気付くような行為であると考えています。記述と記録を分離するなら、たぶんこうした問題は取り上げないことになるでしょう。ですが、大体において、私はこの立場に賛成です。そうすると、全体的にバランスのとれたさまざまなジャンルのコーパスを含む文法が必要になります。それはポアズが既に考えていたことですね。ただし、コーパスの中に何が必要なのかを考えた場合、ポアズによる伝統では、民族に伝わる神話や物語のテキストが主ですが、会話、喧嘩、歌、料理の説明といったいろいろなものが考えられます — それは全てコーパスに加える必要があります。

記録言語学にはもう1つの問題があります。翻訳をどうやって扱うべきでしょうか？ というのは、意味を直接記録することはできないからです。私がコーパスをオンラインで公開し、あなたがたはその音声を聞いて、私が正しく単語を転写したかどうかチェックすることができます。しかし、その単語の意味をどうやってチェックしますか？ 分析者を信頼するしかないですよ。だから、記録主義者の理想を認めるとしたら、なぜその訳でなければならないのかということを正当化しなくてはなりません。データを提供してくれる母語話者は、ふつう、その全てを完全に翻訳してくれるわけではありません。調査の最中とか、その後で、ときどき訳してくれるだけで、「それはどういう意味なの？」と尋ねても、「わかるだろ」の一言で片付けられることが多いのです。ですから、これもたいへん興味深い問題です。

2.6 社会言語学者の理想

他の理想として、私が社会言語学者の理想と呼ぶものがあります。これは、社会言語学的な変異 (variation) を明らかにすべきだと考えるものです。言語を分析する者は、難しい選択を迫られることがあります。1つは、チョムスキー派の漸近線がお好みなら、均質な言語環境下にいる均質な1人の話者を選ぶことです。その場合は変異がより少ないため、より容易に結果を出すことができます。その一方で、文法化、歴史的変化、機能など、変

異は多くの事柄を理解するのに役立つことがわかっています。そのため、より複雑なシステムを記述する必要が出てくるのですが、このような記述の作業はさらに難しい。そこで、ユリエル・ワインライク (Uriel Weinreich) が発展させた共通体系 (diasystem) というアイデアを援用できるのです。つまり、共通体系は、体系の体系のことで、これによってワインライクは構造主義者と比較言語学者の間の対立を調和しようとしていました。共通体系は、文法記述に組み込むべき事柄ですが、今のところ、まだ上記の問題がじっくり考慮されてはいません。

2.7 言語人類学者の理想

次は、言語人類学者の理想、文化的なコンテキストの中で言語を描写するというものです。言語学者は、言語は話されている文化の中を漂っている、と一般の人と話すときには必ず言います。しかし、文法書を読んでもその証拠はたいてい得られません。文法書の中の例文は、無味乾燥で、コンテキストから分離しているように見えます。例文が文化的な特異性をしめしていたとしても、文化的に特異な価値や概念は充分には扱われていないのです。アメリカ・インディアン言語学の中に、その問題について扱った、とても素晴らしい論文があります。ジェーン・ヒル (Jane Hill) の論文もその中にありますので、参照してください。

2.8 教育・伝達上の理想

それでは、別の理想群、教育・伝達上の理想と呼ぶものにうつりましょう。今まで、私が述べてきたことは参照文法にあてはまることでした。参照文法の問題点は、それが電話帳のような類の物に見えることです。その中の情報を見たい場合であっても、内容を読むことまでする必要はありません。おそらく、電話帳の書き方、といったワークショップを催す人は誰もいないでしょう。しかし、文法の読者や文法を使う人がいてほしいと思うなら、究極的には電話帳のような手段を見つけ出す必要があります。典型的には、ソグド語や中国語など何でも、何らかの言語を学び始めたいとき、言語学者なら良い参照文法と良い教育文法を手元に置いて両者の間を往き来することでしょう。なぜなら、参照文法から単に言語だけを学び取るのは不可能だからです。その参照文法だけを見ることにしているのなら、それを読むことさえできません。たいてい、自分の知識を構築していくには、構築物の周りを取りまく事柄を知っている必要があります。そして、たいていの場合、両者の間が往き来されることはありません。このことは問題で、両者の間の相容れない対立はまだ解決されていないのです。

それで、ハンドアウトの3ページ目の上からです。ある種の形式的な観点から見ると、

言語学におけるルールという問題点があります。あなた方は、非常に圧縮され記号化された理論固有の定式化を望んでいるかもしれませんが。しかし読者は、どれだけ長い間その定式化を見分け続けられるでしょうか？ 現代では、例えば読む場合は、1962年ないし1963年に書かれた生成主義的な文法とか、1953年に書かれたタグミーミックスによる文法とか、何人の人がそれを読むことができるでしょうか？ これはちょうど、すぐに時代遅れになるコンピュータのソフトウェアのようなものです。しかし、あまり知られていない言語の場合は、おそらくその人の手による文法が今までに書かれた唯一の文法ということになるでしょう。そしてその文法書は、100年200年の間、読まれ続けることでしょう。つまり、その文法は非常に注意深く書かれていなければならないのです。ここでは、形式主義は、その記述上の利点よりも、時代遅れの理論による不利の方が上回っています。そこには、読者に関する問題点と、読み進める上で必要な、前提知識に関する問題点があります。文法を書く者は、読者に言語学の訓練をどれだけ積んでおいて欲しいと思っているのでしょうか？ 語釈をほどこす場合、例えば「能格 (ergative) だ」と言う場合、読者には能格を知っておいて欲しいと考えるべきでしょうか？ それとも、すぐさま能格の定義をおこなっておくべきでしょうか？ もし定義をおこなうなら、どれだけの用語を定義しなければならないのでしょうか？ そして、文法書の中のどれだけのページ数を定義に割かなければならないのでしょうか？ バウアー (Bauer) とほかの著者による1997年のマオリ語 (Maori) 文法は興味深く、読者層に合わせた書き方がなされています。というのは、読者として想定される平均的なニュージーランド人が言語学者ではなく、マオリ語を話すマオリ族も言語学を勉強したことがないはずだからです。そのため、分析用の全ての用語がはじめに定義されていて、ゆーに100ページほどが、そのことについて割かれています。その定義の後によく文法の解説が始まるという構成です。

これらはいくつかの理想に過ぎません。全ての理想を満たした文法書は現存しないということ、そして、どの文法書も理想を全て満たすことはないということはかなり明白だと思います。これは、これら言語学におけるルールの間には交換条件ないし対立があるからです。文法を書くときは、全ての交換条件・対立を負担しなければならず、これらのルールのうちどれに重点を置くかを決定していくことが問題になります。これは考察のための格好の練習だと思います：「満たせるだろうか... とりあえずここでは理想の1つを満たすことに集中しよう」、「1つの理想を満たしたので、別の理想を満たすことに集中しよう」、「理想を満たすことはできたから、どこまで両立できるか考えてみよう」。博士論文を書いている人にとっては、読者といった問題はそれほど重要ではないでしょう。その博士論文はおそらく2人の試問官および指導教官、そして自分と協力者が読むだろうことはわかっています。しかし、いざ出版するとなると、より多くの人に読んでもらいたいはずで

そうであっても、全ての問題をいっぺんに解決しようとしなことが肝要でしょう。また、博士論文を出版しようとして、「できるだけ変更は最小限にしたい」と思うでしょう。しかし、読者が異なるわけですから、たくさんの変更をすべきです。

ここまでが理想に関する議論です。

3 過程：屋気楼へ近づいていく

3.1 2重螺旋

ここまで、私たちの目標が何なのかを静的なものとして説明する、ある種の理想について述べました。どうやってそのような理想を達成するのかという問いは、さらに難しい問題です。音楽を書くやり方を見たり、小説や何かを書くやり方を見ると、おのおのに独自の方法があることに気付くでしょう。私は17歳くらいのとき、たいへん感動したのを思い出しました。どういう訳か私はヘンリー・ミラー (Henry Miller) が好きでした (今はそうではありませんが)。その頃、彼がどのようにしてそれほど多くの小説を執筆しているのかを知って感動したのです。よく酔っ払っていた、と彼は言っていました。夜にお酒を飲んでいるときに執筆し、翌朝しらふで機嫌悪く起きて編集していたそうです。これが彼の秘訣でした。素晴らしい。彼にとってはとても良いやり方ですね。しかし、全員がこのやり方で小説を書くわけではないでしょう。文法についても同様のことが言えますね。各自が独自のやり方を見つけるべきことで、私は口出しできないのです。ここでは助けになり得る事柄についていくつか見てみましょう。

完璧な文法を書くこと自体は屋気楼のようなものです。私の話は屋気楼にだんだん近づいていってます。この理想に向かっていくプロセスを、螺旋状のプロセスであると捉えることにしましょう。そして、2つの意味で螺旋を登っていきます。すなわち、総合的なボアズ3作の一環としての螺旋と、文法それ自体の中の螺旋です。1つ目の螺旋は重要です。文法・テキスト・辞書という3重の仕事は、互いに絡み合っていると(どの言語学者も)みなさなければなりません。もちろん、これらのうちのどれかを優先する場合もあるでしょう。例えば、文法書を博士論文として書いているなら、文法自体に焦点を当て、末尾に小さな辞書と3つか4つのテキストを配置するかもしれません。この場合、末尾の辞書とテキストは一定量以上のページ数をとらないよう制限されてはいますが、少なくとも自分のキャリアを積むにしたがって、その3作を進めていくというのが理想的です。しかし実際は、これらの仕事を同時におこなう必要があります。例えば、何か新しい事柄を見つけるためにテキストを見るとしましょう。一番面白い事柄というのはたいていテキストから見つかるものです。フィールドワークが、質問表や「レ印」をつけるボックス(□)に頼って

おこなわれると考えているなら、「なるほど、こうやって関係節にするんだね」などと言
い、そのまま何も新しい事柄を発見することはないでしょう。面白い事柄というのは、そ
れ以前に誰も質問しようとしなかった事柄です。テキストは、言語の研究における新発見
が絶え間なく流れている川のようなものです。その一方で、テキストの理解は、文法を仕
上げてからでないとうまくいかないでしょう。辞書についても、調査対象の言語をうまく
学ぶために 1000~2000 語くらいの数の語彙を得るという第 1 段階があります。たとえ文
法記述に焦点をあてている場合であっても、対象言語による基本的なピジン (pidgin) で会
話ができるくらいの、ある程度の能力が必要です。少なくとも、短めの辞書を使った会話
ができるようにしておくことが肝心なのです。ただ、完全な辞書を作るのに、1 人分か 2
人分の人生をつかってしまうこともあります。そして、当該の言語を研究している間じゅ
うずっと加えるべき新語が出てきます。これが文法であれば、規則を追加する必要がない
ところまで来た、と主張する人もいます。私は信じませんが、これは全くもって理不尽な
言い方、というわけでもありません。言い換えるなら、文法作業の方が辞書作業よりも早
く停滞期に入ったということでしょう。前述したように、この 3 つの作業、すなわち文法
作業・辞書作業・テキスト作業は、全てを同時にやる必要がありますね。

文法の中でも同様の螺旋状の原理が適用されます。文法の中にはさまざまに異なる下
位区分があります。単純に言うと、音声学、音韻論、形態論、統語論、アスペクトや対格
(accusative case) 等の範疇の意味論、語類等の体系といった区分が考えられます。そして、
これらはそれぞれに 1 つのセクションやサブセクションがあてられるでしょう。

ただし、それぞれの区分は互いに依存しています。例えば、音韻論の問題を 95% 解決
すれば、ほとんどの音素が決まるでしょう。しかし、2 つか 3 つの音素に問題が残ってし
まうと、それを音素目録から取り除いてよいものか確信が持てないままになります。これ
は、複合語境界による条件付けの環境とか、その種の問題によって説明することができる
ものかもしれません。このように、時に未解決の課題と疑問点が残るのです。そして複合
語の形態法に取りかかると、それはまた名詞・形容詞の連続等から複合語を区別するよう
な統語テストに依存していたりします。まるで未完成のバイオリンがいっぱいある大きな
工房にいるかのようです。これはここに、あれはあそこに置いて、続けてこれに少し、あ
れにも少し取りかかり... といった具合です。しばしば、多少のお金もうけのために、ある
いは論文を提出して指導教官の小言を止めるために、程度の差こそあれ、文法記述を仕上
げることでしょう。そうしてこの種の螺旋状のプロセスを経るのです。

言語の勉強をするときとちょうど同じです。参照文法を読むのはとても大変な作業で、
私はあまりうまく読めません。1 つの章を読むのに、初めの数ページはいいのですが、5
ページ目くらいから大変になってきます。他の章でわからない事柄があって、そこに戻っ

たりするでしょう。言語を勉強するときと同じですね。数ヶ月後か、あるいは10年後かに戻ってきてはわずかに理解が進む、といった具合です。このことは文法記述に知性が要求される所以だと思います。文法を記述するときは、何百の問題と何千の種々の規則全てを同時に扱わなければなりません。それは最大の問題、つまり知的訓練上の問題と同じ程度に大きな問題の1つになっています。人間の脳は、他に考える事があまり多くない場合に限り、相互に関連する問題を大量に考えることができますね。行政について、結婚について、住宅ローンなどについて考えなければならないとき、心の余裕がないために文法記述などできないでしょう。文法記述には、邪魔されずに集中できる時間を継続して長く持つ必要があります。

その場合、自分でおこなった全ての段階における暫定的分析を把握しておく必要があります。例えば、音韻論の章は半分できあがっていて、あと3ページは複合語、あと少しは関係節か何かについて概略を述べるようにしておくことがよくあります。音韻論の章に着手しているときに、突然ある文に気付いて、「おもしろい関係節だけれど、これを既に記述したかどうかははっきりとは思い出せない」と感じるでしょう。結局戻ることになり、しかも関係節について書いた内容を見つけられません。しかたなく予定していなかった新たなセクションを加えることになり、複合的な節構造について書いた章の組み立てを変更しなければならなくなります。

ついには、2つの章を一緒にしてしまったりすることでしょう。これは文法を記述しにくくしている原因です。構成を考えることも確かに重要なのですが、その言語を始めたその日から目次をつくっていくのが実際的です。ただし、そのようにすると文法記述は、甲冑とは違って、静的ではなくなります。変更し続け、更新し続け、常に目次に立ち返り、目次と取り組むのです。それは建築物を相手にしているので、部屋デザインまで戻って下りていくことになります。私がある文法に取り組んでいたときのことですが、テキストの単文をただ見ているだけだったことに気付きました。辞書の項目を作っていて、例文を1つ付けた1つの単語を1項目とする作業をしていました。1つの例から、文法の中で考察すべき事柄が6,7個出てきます。しかし、それを常に念頭に置いておくのは大変です。辞書の項目のために例文に取り掛かり、音韻論の章で記述を続けながら、形態論の章では別の記述をおこなうでしょう。音韻論の章での記述のときは、「おっと！無声閉鎖音の直後に起こる音韻規則があるにちがいない。チェックしておこう」と考えたりするでしょう。これが全てをまとめてしまうときの問題で、扱いがとても難しい問題です。ただ、これは創造的な作業の中の科学的発見としてはよくあることだと思います。そうして、文法は自分の手のもとで年月をかけて成長し、形をなし始めます。ただし、全てが説明されているかどうか確認するため、常に全テキストへ立ち返らねばなりません。残念ながら、人

間はいとも簡単に満足してしまうので、文法自体が大きければ大きいほど、より「やった、全部記述しきったぞ」と考えてしまいます。しかし、テキストごとに興味深い事柄が必ずあるものです。私は、文法を書いているときは、未分析のテキストに見入る時間を毎日ちょっとずつとるようにしています。まだ記述されていないような事柄を求めて、ただ単に目を光らせておくのです。こうすることで、自分の分析がまだ完全でないことを心に留めておくことができます。締切りもありますし、難しいセクションを丸ごとかかえているので、これは大変なことです。自分の時間を全て簡単に費やしてしまいます。

これは良いか悪いかわかりませんが、私はフィールドワークをするときはいつも、ノートもとらず、質問もせずにいる時間をとることにしています。なぜなら、分析的な能力を上げると同時に、その言語を流暢に話す練習をしなければならないからです。もしフィールドワークで質問ばかりしていたら、常にノートをとることになり、話す練習の邪魔になってしまいます。言語学者であることを忘れ、おしゃべりをし、くつろぐことも、楽しい時間です。間違えたら間違えたで仕方ありません。何ヶ月かの調査の中で、誰かがとても興味深いことを言ったなら、まあ、覚えようとするのです。そうできなければ、それはそれで仕方ありません。そのような小さなはけ口をつくることも大事です。

文法記述にはテクノロジーも必要です。使うべきコンピューターソフトについて議論が巻き起こっていますから、まるで戦争のようです。今のところ、技術者が勝利をおさめつつあるようです。彼らは強力な武器を持っていて、軍事的に有利な立場にあります。シューボックス (shoobox)、ツールボックス (toolbox)、エラン (ELAN) 等々のたいへん便利なソフトを使う人が増えてきました。しかし、コンピューターソフトが全ての問いに答えてくれるわけではありません。ボブ・ディクソンのように、それに反対する人もいます。彼は、一昨年、ヤラワラ (Jarawara) 文法でブルームフィールド賞 (Bloomfield Award) を受賞したとき、若手の言語学者に対して、事実上、「テクノロジーを使っては駄目だ！文法を書く邪魔になるぞ！」とアドバイスしました。それは彼の見方ですが、ここでは賛否両論を比較してみましょう。テクノロジーの利点は、それが一貫した分析を強いることです。例えば、1つの単語に常に1つの語釈をほどこすということを確実におこないます。そしてコーパス全体を瞬時にチェックすることも可能にします。これこそテクノロジーの最も有利な点です。巨大なコーパスをくまなく見渡すことができるのです。この点で言うと、今のところエランが最も有用なソフトでしょう。エランは、ひとたび転写済みのファイルを全て開けば、単語でも何でもグーグル (Google) でやっているように検索して結果を表示することができるのです。しかし、それでさえも、必ずしも有益であるとは限りません。なぜなら、何かを書くたびに自分の主張を、例えば200の文についてチェックしていくとするなら、記述のペースがかなり落ちてしまいます。事実、これを使っている多く

の人が博士論文を書きあげられていません。3つか4つの例をチェックするだけならまだいいかもしれませんが、100の例をチェックするとなると、時間がかかり過ぎます。もちろん科学的な観点からすると、それだけチェックすることは良いのですが、人間の使うことには不完全な箇所や間違いも多く含まれています。コーパスを文字通りに捉えてしまうと、かなりの寄り道をすることになってしまいます。もう1つの利点は、辞書作成とテキストの語釈が同時並行的におこなえるという点でしょう。

一方、テクノロジーの最大の欠点は、心理学者の言う早期閉鎖 (premature closure) です。つまり、解答があると決めつけてしまって他の考えを追求しなくなるのです。特に、シューボックスの場合、早期閉鎖が助長されています。語釈を入力するたびに、その候補を挙げてくれるので、「そうだ、それでいいのだ」と言っていればいいからです。それでよくないこともありますよね。だから、私は自分の手と目でチェックしたいですね。他に生じる重大な問題は、自分の頭で分析すべき事柄をコンピュータに任せてしまうことです。もちろん、日々の生活で習慣になっていることは機械やソフトにやらせてもいいでしょう。食器洗い器、炊飯器といったものです。しかし、やらせたくないこともあります。歯磨きをやらせたくはないでしょう？ 自分に代わって恋人と愛の営みをしてくれる機械なんていないですよね。自分たちの手でやりたいと思うでしょう？ 文法を書くことは、どうでしょう — どちらかと言えば、自分たちの手でなすべきことではないでしょうか。ココで、頭の中で、最大限の楽しみを味わいたいのではないですか？ なぜなら、全ては頭の中にあるはずだからです。その言語を話すことができなければ、自分のために話してくれるソフトを手に入れることはできません。ですから、ツールを使うのはいいんですが、コンピューター中毒になるべきではない、と思うんです。良い分析を妨げてしまうと思うのです。でも、まあ、皆それぞれ性格が違いますし、ソフトの使用に長けている人もいれば、そうでない人もいます。自分に最も合うやり方を見つければいいんです。

3.2 孤立した問題と複雑に結びついた問題

次の問題は、私が「孤立した問題と複雑に結びついた問題 (‘Isolated vs. nodal problems’)」と呼ぶものです。「複雑に結びついた問題」というのは標準的な用語ではありません。良い表現はないものかと探しながら、さしあたり使っているものです。「結びついた点 (node)」とは、たくさんの事柄が1つに集まる場所のことです。どの文法にも、他の規則が全く依存しないような類の規則があります。その場合、それだけを述べれば、それで記述が完了します。その一方で、たくさんの事柄と相互に作用し合っている規則もあります。そこにはあらゆる種類の複雑な相互依存性が見られることでしょう。こうした相互依存性は最も記述しにくい事柄です。なぜなら、それをどう分析するかが、全体に大きな影響を与える

からです — 文法のすみずみにまでその影響は及びます。以下では、そのようないくつかの例を見ることにしましょう。

どの言語においても、「語類」は、こうしたタイプの、極めて根本的な問題を生じます。どの言語の文法を書くにも、語類について独立したセクションをもうけるべきだと私は思います。語類のセクションは、最初に書くべきセクションの1つであり、また、最後に書くべきセクションの1つでもあります。では、なぜそれが重要なのでしょうか？文法規則がどの語に適用されるかが、語類の分析によって決まってくるからです。規則 X が語彙項目 A に適用されるか否か？といったことはおそらく語類によって決まってくるでしょう。例えば、名詞という語類はこれこれの接尾辞を取る、といった具合です。そのような規則を適用するためには、ある要素が名詞かどうかを知っている必要があります。逆に、仮定されている規則をテストするためには、ある要素が名詞かどうかをチェックできるようにする必要があります。語類に関する定式化は文法の他の部分にも影響を与えるはずで、例えば、名詞と形容詞という語類をはっきり識別できると言うなら、派生形態論のセクションでは、形態素とかゼロ転換 (zero conversion) とかを使って、名詞から形容詞、あるいは形容詞から名詞をつくる、といった派生方法を解説する必要があるでしょう。一方、名詞と形容詞が1つの類をなすのなら、それをする必要はないでしょう。このように、そこには様々な種類の波及効果があるのです。これは複雑に結びついた問題の一種なのです。

複雑に結びついた問題の2つ目は、屈折・派生の区別です。これはほとんどの文法において重要です。例えば、多くの文法書では、派生形態論と屈折形態論が別々の章で記述されています。私がカヤディルド語で最初の文法を書いたとき、屈折と派生は本当に困った問題でした。この文法書を読んだ方ならご存知と思いますが、カヤディルド語では格標識 (case marker) が4層まで積み重なります。それなのに、屈折はふつう最後の要素だと定義されており、逆に他の接辞よりも内側にある接辞はふつう派生接辞だと考えられています。つまり、屈折が他の屈折に積み重なるなどあるまじき事だ、ということです。カヤディルド語ではさらに他の問題も関わっています。それは、屈折接辞がそのくつつく単語の語類を変えてしまう場合があるという問題です。一般的に言って、屈折がこのようなことを起こすとは想定されていません。屈折は、語類を変えないでおくものなのです。しかし、カヤディルド語のとある格接尾辞を名詞に付けると、それは統語的には名詞のままだけれども、形態的には動詞になってしまい、動詞屈折をとれるようになるのです。時間が無いのであまり詳細には立ち入りませんが、このことが文法を書く上で特に目立った難題だったことを解説しようと思います。文法書の中で、「名詞なのか動詞なのか」という点で分類する必要があり、またこれらについては記述する用語が必要となり、結局、統語的

な名詞と形態的な名詞を区別する必要があるかどうかを決めることになりました。そして、そのことをどこでどのように記述すべきでしょうか？ 派生形態論のセクションでしょうか、それとも屈折形態論のセクションでしょうか。また、格屈折の積み重ねというクセもまた、カヤディルド語の語類を定義しにくいものにしていました。例えば、カヤディルド語の位格標識 (locative case marker) は、名詞に付く場合は単純で問題ありませんが、格が節を支配するときは、節内の単語全てに位格標識が付くという特定の環境があります。その場合、格標識が動詞に付く場合も出てきます。テンス・アスペクト・ムード等をとる語は動詞だと定義し、格をとる語は名詞だと定義することは、カヤディルド語におけるこのようなふるまいにうまくマッチしません。ですから、「派生」と「屈折」の違いを定義することに関連した、あらゆる種類の問題があるのです。最終的には、この文法を書くために、「派生」と「屈折」の定義を修正しなければならなかったのです。これら全てを扱うため、文法書の第3章の中に「記述の予備的な説明」と題するセクションをもうけ、こうした複雑に結びついた問題の議論をおこないました。カヤディルド語には通用しない、いくつかの一般的な仮定について、それがなぜ通用しないのかという原因を明らかにし、定義をほどこし、先に進めるようにしたのです。

複雑に結びついた問題の3つ目は、中核的な文法機構と文法関係 (grammatical relations) についてです。例えば、この言語は主語を持つ言語だろうか？ それとも「話題」を基盤とした言語だろうか？ 両方を持つ言語だろうか？ それは文法化された焦点なのだろうか？ これが態 (voice) や関係節とどう関わるのか？ 一致はどのような文法範疇に従うのか？ 等々です。中核となる文法関係を分類するとき、非常に多くの問題を解決しなければなりません。最悪な選択の1つは、ただ単に伝統的な分析でよしとすることです。なぜ最悪かと言うと、ある意味では、全く文法書が無いよりも、想像力の無い文法がある方が悪いからです。そうした文法を読むと、「うーん。退屈な言語だ」と考えてしまい、そこにあるはずの興味深い事柄が見えなくなってしまうでしょう。これが、きちんとした文法を書かねばならない重要な理由の1つです。文法関係に関する議論は文法のたくさんの部分からの情報に頼っています。関係節、補文節、等位接続、再帰態と相互態の形成、一致の形態法、語順、動詞的語彙など、極めて大量の問題が文法関係に結びついているのです。

全ての言語が、複雑に結びついた問題を同じように抱えているわけではありませんが、私は文法関係の機構と語類はどの言語にも見られる問題だと考えています。他に、その言語に特有の問題もあると思います。それは記述するまではわからないし、ある程度見当がついても、どれがそうした問題かを見分けることまではできないでしょう。そして、複雑に結びついた問題が多い言語ほど、それを分析するまでに多くの困難を伴います。なぜなら、文法の端から端までたくさんの波及効果が見られ、分析の自由度が高まっているから

です。 *Catching Language* 所収のヒンメルマンの論文は、タガログ語をはじめとするフィリピン諸語について次のように述べています。

文法の分析はだいたい 250 年以上もの間続いてきたが、タガログ語 (ないし他のフィリピン諸語) の基本的な文法描写において、広く受け入れられる慣例は未だ充分には確立されていないようだ (Himmelman 2006a, 487)。

ほとんどの言語の場合、これはあてはまりません。これは極めて例外的なケースです。どれだけ難しい言語でも、優れた言語学者たちが数十年も研究すればほとんどの分析は確定することでしょう。例えば、ワルピリ語 (Walpiri) はたいへん複雑な言語ですが、ケン・ヘイル (Ken Hale)、デヴィッド・ナッシュ (David Nash)、メアリー・ローレン (Mary Laughren)、ジェーン・シンプソン (Jane Simpson) のような学者による 2、30 年の研究を経て、皆が大体同意する分析に至りました。もちろん、まだ多少の調整をすることもできますが、その言語を記述する概略的な方法はすでに確立されています。しかし、タガログ語は至るところで未だあれこれと討議されています。なぜこのような事態になっているのでしょうか？ その理由の 1 つとして、1 言語の中に少なくとも 2 つの、かなり難解な、複雑に結びついた問題が同居しているからだと思います。それは、奇妙な語類の体系と、文法関係の奇妙なシステムの 2 つです。^{*5} 語類の問題に関する限り、フィリピン諸語は名詞・動詞の区別がたいへん緩い、あるいは全く区別されない、あるいは形態的には区別されても統語的には区別されないという傾向があることがわかっています。(もちろん他の主張もあります。) それと同時に、文法関係のシステムについては、「それは焦点のシステムか?」「態のシステムか?」「それが態のシステムなら、どれが無標の態か?」といった答えの出ていない問題もあります。あるいは、それは他のタイプのシステム、いわゆる「方向付け」システム ('orientation' system) であり、「その男が猿を追いかける」という文を「猿を追いかける者はその男だ」のように、「その男は猿に追いかけられた」を「猿に追いかけられる者はその男だ」のように、方向付けられた名詞構文によって翻訳すべきものかもしれません。フィリピン諸語に関するこれら 2 つの名高い問題は、表裏一体のもので、片方が違ってくるともう一方の問題に対する可能な解決策の範囲も変わってきます。私は、それはフィリピン諸語が未だ難解であることの主な理由だと思っています。文法を書くときは、これらの複雑に結びついた問題は何なのかという感覚をやしなない、作業戦略を練っておかなければなりません。なぜなら、複雑に結びついた問題だけに専念している

^{*5} ヒンメルマンの論文は複雑に結びついた問題の 3 つ目について議論しています。態・焦点の派生 (voice/focus derivation) は、実はパラダイムに並べられる必要があり、屈折範疇と対立する派生的という概念では処理できない何かであるようです。

と文法を書き終えられないからです。より単純な問題も扱わなければなりませんからね。まあ、まずは単純な方の問題を解決するのが良いでしょう。しかし、いきなりエベレストに登りたいという性格の人がいます。そのような人は、「いったんエベレストに登れば、自分の家に戻って階段を登ることができるんだ」と言います。それはあまり良い戦略ではあるとは言えません。でも、その気持ちはわかります。複雑に結びついた問題をどうやって解決するかということが、文法全体の構成を決めることになりますからね。そして例えば、最終的に、タガログ語には名詞・動詞の区別が無いと確信するかもしれません。そうなると文法の体系付けの大半を変更することになるでしょう。最終的にはその問題を解決しなければなりません、とりあえず分けて扱うことで、個別に解決できる事象もたくさんあります。ですから、問題を取り上げていく順番にはある種の技巧をこらすことが必要なのです。

3.3 良いモデルの重要性：読書の七柱

では、登頂のための心構えとして、良い例の重要性という問題にうつります。もちろん良い例文を用意するのも必要ですが、そういうことではありません。文法を書くのに役立つ例、文法を組織化する方法的モデルを示してくれるような例について述べていきます。あなたがそれを盲目的に真似たくないと思うにしても、文法を書き始める前に問題のいくつかは解決されていて欲しいとは思うでしょう。全ての問題を同時に解決することはできません。良い例が既にあるなら、たくさんの仕事をする手間を省くことができ、余ったエネルギーと思考力を、自分の言語から提起される本当に独特で難解な問題の解決へと集中させることができるのです。『知恵の七柱』のように、読書の七柱 (**seven pillars of reading**) と私が呼ぶものをここで取り上げることにしました。これらを読むのに十分な時間を費やさなければ、本当に優れた文法書を書くことはできないでしょう。もちろん、私が間違っていて、何も読まず、いきなり良い文法書を書くような人がいるかもしれません。しかし、たいていの場合には嘘で、「何も読んだことがない！」というフリをしているだけなのです。

第1の柱：自分の母語の文法を見ることはたいへん重要だと思います。なぜなら、文法を書く者は、理想的には、母語話者にそれを読んでもらって「そうです、これは私の言語を記述したものです」と判断してほしいと願っているのです、自分の母語の文法を見ることによってそれがどんな感じなのか、何が良くて何が良くないのかを知りたいと思うからです。当然、母語で母語を記述した文法を読むことが多いと思います。もちろん、それは自分が書こうとしている文法とは状況が違っています。その言語の文法を同じ言語で書くということはふつうないはずですが。ただ、母語で読むことは一番簡単ではあります。と同時

に、母語以外で書かれた母語の文法を読むことも重要で、これは自分が書こうとしている文法の場合と似ています。例えば日本語母語話者なら、英語、ドイツ語、中国語等の言語で書かれた日本語文法を読むと、外から日本語を説明するとはどういうことなのかがわかります。

第2の柱は、よく知っている言語、話し方や読み方まで勉強した言語の文法を読むことです。ここでも、できればさまざまな言語で書かれたものを読むのがよいでしょう。なぜなら、母語の場合とは異なり、他の言語を学ぶことがどれだけ大変で難しいかをまだ覚えているからです。そして、これらの記述が、自分が学んできた文法と比較して、どれだけの水準のものかを知ることができます。これが興味深いのは、私たちの多くは、他の言語の事象を、参照文法に限らず、さまざまな方法を駆使して学んできたはずだからです。

第2言語、第3言語として英語を学んだ人には、ハドルストンとプラムの『現代英語文法入門』(Huddleston & Pullum 2002)、ディクソンの『意味的原則に基づく英語文法』(Dixon 2005)、クァークとグリーンバウムの『現代英語文法』(Quirk & Greenbaum 1973)といった、多くの選択肢があります。刑務所に入れられて、もて余すほどの時間がある人には、イエスペルセンによる20巻の英語文法もあります。そして、コーパスに依拠した文法がどんなものか見たい場合は、『コリンズコウビルド英語文法』(Sinclair 2005)があります。

第3の柱は、一般にエキゾチックな言語と呼ばれているもの、つまり皆さんが知らない、その参照文法を通してしか知るすべのない言語の文法を読んで学ぶというものです。そのような文法は、自分が書くことになる、あまり記述されていない言語の文法とほぼ同じようなものだからです。まず第1に、他の言語について多くのことを学びますが、それと同時に、その言語がどのように記述できるのかということも理解するわけです。私のお気に入りの文法は、クルスピのセメライ語(Kruspe 2003)、ハスペルマスのレズギ語(Haspelmath 1993)、モーゼルとホヴドハウゲンのサモア語(Mosel & Hovdhaugen 1992)、リヒテンバークのマナム語とトアバイタ語(Lichtenberk 1983; Lichtenberk 2008)、ニューマンのハウサ語(Newman 2000)、大角のティンリン語(Osumi 1995)、サットルのムスクィアム語(Suttles 2004)、田村のアイヌ語(Tamura 2000)、ヴァン・デア・ヴォートのクワザ語(Voort 2004)、ヴァレンタインのニシュナアベムウィン語(Valentine 2001)などです。(オーストラリアの文法にも良いものがありますが、それについては第4の柱のところで議論することにします。その理由は後で述べます。)

第4の柱は、記述の少ない言語の中でも、自分の研究している言語と歴史的な関係のある言語を記述した参照文法(もしあればですが!)を読むことです。そうした文法では、あなたが直面する記述的問題と同様の問題を考察している可能性が最も高いのです。例と

して、統語テストの作成を考えてみましょう。どの文法家にとっても、仕事の大きな部分を占めることとなります。例えば、「主語であるか否かを測るテストをどうやって作り出すか？」。でも、言語ごとに異なるテストが必要となり、そのことは言語の記述を始めるに際し、とても気の滅入ることかもしれませんが、標準的なテストは一切適用できないのです。そして、「どうやって主語を識別するのか？」という問いも出てきます。ですが、自分のやっている言語と関係のある言語を研究した人が既にいれば、そこから情報を得る可能性が生じます。私は、カヤディルド語の文法を書いているとき、ディクソンが書いた2冊の重要な文法書、ジルバル語とイディン語の文法書からとても大きな影響を受けました。ボブ・ディクソンのジルバル語の授業を受ける機会に恵まれたため、文法書からだけでなく、その授業からもジルバル語を知りました。しかし実際は、イディン語文法の方が(有名度は落ちますが)、より良く、より深く、より自然な言語データを使った文法書です。そして、他の文法書も何らかのかたちで役に立ちました。ピーター・オースティンのディヤリ語文法 (Austin 1981) は、当時ではおそらく最も素晴らしいパマ・ニュンガン (Pama-Nyungan) の文法書で、簡明かつ正確なものでした。タムシン・ドナルドソンのギャンバア語 (Donaldson 1980) は、文脈と語用論についての情報が見事に盛り込まれており、今でも最も綿密な文法書と言えます。オーストラリアの言語のハンドブック (*Handbook of Australian Languages*) に所収の簡易文法も優れたものが多く、その中にはサンドラ・キーンのコクルタ語 (Keen 1983) の文法がありました。コクルタ語は、カヤディルド語と多くの点で近い(しかし他の点では完全に異なる)言語です。そして、ケン・ヘイルによるラーディル語の50ページほどの短い文法スケッチ (Hale 1997) もありました。その出版は1997年でしたが、私がフィールドワークを始めた頃、既に謄写印刷物として利用することができました。それは驚くほど洞察に満ちたものでした。カヤディルド語には、時制によって決まる格語尾と動詞的な格標識という2つの重要な問題がありましたが、ヘイルはラーディル語に見られるその種の問題を既に考察しており、それがたいへん役に立ったのです。こういった文法書は全て影響力が大きかったのです。これらを読んでいなければ、私は、カヤディルド語の文法の中で同じやり方では書けなかったであろう、あるいは、少なくとももっと時間がかかったであろう部分を指摘することができます。一方、自分のやっている言語と関係のある言語の文法書が常に最良のモデルとなるわけではありません。ビニン・グン ウォク語 (Bininj Gun-wok) の文法、すなわち私にとっては2つ目の文法を書いた際に、オーストラリアの言語の文法書が、その構成において、満足のいくレベルまで達していないことに気がきました。その著者たちはオーストラリアの言語を記述するときの問題に本気で取り組んでいないと思いました。私は結局、世界の他の地域の、複統合的な言語の文法から、特にイロコイ諸語 (Iroquoian languages) やナワ

トル語 (Nahuatl) の文法からはるかに多くのことを学びました。

それでは、第5の柱にうつります。これは、やや別のジャンル、すなわち完全な文法というよりはテーマが絞られたエッセイや論文などです。言語にそなわった特質をとらえるという理想について既に述べましたが、1つの文法の中でそれを実行するのは困難な場合があります。1つの文法の中では全てを記述しなければなりません。しかし、言語にそなわった特質を捉えるということは本質を捉えることです。全てを記述するという作業は、そのような作業にとって、邪魔になることもあります。その一方で、詳細には立ち入らずに本質的な点だけをとらえるという記述のジャンルもあります。その例として、ミシェル・ローニー (Michel Launey) がアズテック語族のナワトル語について書いたフランス語の本はたいへん興味深いものです。その中で、彼は汎述部的 (omni-predicative) な文法というアイデア、すなわち、その言語の全ての語類が述語として使われ得るというアイデアを取り入れ、それがさまざまな現象をどのように説明するかを検証しました。ただし、彼は言語の側面を全て記述しようとはしませんでした。このジャンルの他の例としては、ジュディス・アイッセン (Judith Aissen) が書いたツォツィル語 (Tzotzil) の項構造についての本があります。それは、項構造とその変更を記述した本の中では私の知る限り最も良いものだと思います。彼は、事実上、「他のことは全て忘れて (あるモデルで見たときの) 項構造に焦点を当てることにしましょう」と言っているようなものです。実際、項構造の記述においては、本当に優れている本です。こういった類の本をもしエッセイと呼ぶとすれば、それらはこうした本質的な問題を扱うときの助けとなります。残念ながら、それを文法書に組み込むのはたいへん困難なのです。ただし、そのモデルに従った記述を、文法の一部や章の導入部分などに組み込むことで、なんとかなるかもしれません。

第6の柱は、特定のテーマを類型論的にどう扱うかということに関わります。マーティン・ハスペルマスの不定代名詞についての本は既に例として取り上げました。このような本や論文はどんどん増えています。例えば、否定 (negation)、関係節 (relative clauses)、テンス・アスペクト・ムードなどについてのものがあります。自分の書く文法の各部分において、世界の他の言語が同様の範疇をどのように文法化するのか、知っておきたいはずですから、こうした本は言語の記述に非常に役に立ちます。もちろん、私たちはみな人間であり、与えられた時間は限られています。それらを全てカバーすることなどできません。全てを読みきることなど誰にもできませんから、自分が見過ごしてしまうかもしれない事柄については同僚に教えてもらうようにしましょう。でも、たいいてい、各々の言語には特有の複雑かつ興味深い領域があります。だから、そのような領域の事柄については、こういった本を読んでおくことが特に重要なのです。

最後の第7の柱は、自分の言語や関係の近い言語に見られる特定の問題についての論文

を読むことです。これは、標準的な言語学の論文と文法との関係が興味深いものだからです。通常の論文は、ただ単に、文法の中にある全ての事柄を前提としています。そして、そこでは何らかのトピックについて下位データが扱われますが、それはおそらく文法の中で取り上げたいデータ量を越えた、例えば30ページもの長さには及ぶものです。元の文法の中では、これは2ページほどに縮められているかもしれません。文法を書くときは自分自身に問い続けます。「常に自分の分析を正当化する議論を展開しなければならないか？あるいは分析を述べるだけで済ますことができるか？」。司祭、ないしローマ法王の見方という立場で考えると、「こういうものなのだ！」「この言語ではこれこれのように働く。この言語では動詞がこれに一致する」でいいことになります。ところが、もう1つの立場に立てば、「さて、この言語で起こっていることを理解するには2つの方法がある。Aとも言えるしBとも言える。ではその証拠について考えよう。これはAを支持する証拠で、これはBを支持する証拠である。全体的に見た場合、Aの方がいいということになる」となります。文法を書く際に、どちらのアプローチをとりますか？1つ目の見方を宣言的アプローチ、2つ目の見方を論証的アプローチと呼ぶことにします。宣言的アプローチを取るならば、文法は確かにより読みやすいものになります。ちょうど全体主義的な社会での行動パターンがわかりやすいのと同様です — 単純に指示に従うだけなのですから。読み手にとっても、アプローチしやすいでしょう。しかし、そのやり方は間違っているかもしれません。間違った独裁者に従う場合だってありますから！これに対し、論証的アプローチは、代替の分析をいくつか提示し、より柔軟であり、読み手にいくつかの選択肢を与えるという点で優れています。ただし、それを読んだり書いたりするにはより時間がかかります。ですが、言語学の論文では、そうしたことが充分可能です — 各々の分析についての議論を十分に尽くすことができるのです。一方、文法の中では、本当に必要なときだけ議論を展開すべきです。全ての場合においてそれをするのはやめましょう。さもなければ、退屈な記述になってしまい、たいへん締まりのない文法という印象をあたえかねません。ただし、決定的で根本的な点、ないし難解な点については、議論すべきです。

言語と取り組む過程でとるべき正しいアプローチとは、より論証的になる可能性がある点については論文を書くことだ、と考えることがあります。そうしてから、文法の中でより宣言的に扱い、論証のために書いておいた論文を参照するよう指示すればよいでしょう。このやり方は、心理療法家に見てもらふことと似ています。自分のつくった体系から論文の中へとそれを取り出してしまうのです。そうすれば、文法の中では既に病気を克服していることになります。それが第7の柱です。

私は、今述べた全ての分野について読むことは本当に重要なことだと思っています。もちろん、言語データと直接取り組まなくてはならず、分析者とデータの間には読書が全く介

在しないこともあるでしょう。しかし、言語学的記述における問題はとても難解なので、得られるだけの助けが必要なのです。

3.4 一生の問題としての文法記述

最後に要点だけ手短にとりあげます。私は、話の初めに、文法を書くことは一生の問題のようなものだと言いました。そのやり方を教えるなどとは考えていません。*Studies in Language* の「どうやって文法を書くか」という特集号に、ウェバーが書いた素晴らしい論文があります。(Weber 2005, そして、ここまでの議論はその号の全ての論文と関連しています。) ウェバーの論文は、あなたが人生で何をして、物事をどうまとめていくかという問題を扱ったものです。

さいごに

長田先生が私にこの講演をするよう招待したのは、日本語で文法記述の全く新しい伝統を作っていこうという、たいへん興味深いプロジェクトに、この場の大勢の方が関わることになるため、と聞きました。インド亜大陸の各語族から1つずつ言語を取り上げ、それらについての第一級の文法書を出版していく予定と聞いています。それらの文法書が読める機会を心待ちにしています。最後に、言語記述という、困難な、しかしやりがいのあるプロセスについて、考えを述べる機会を与えていただいたことに御礼申し上げます。

参考文献

- AISSEN, JUDITH. 1987. *Tzotzil Clause Structure*. Dordrecht: Reidel.
- AMEKA, FELIX, ALAN DENCH, & NICHOLAS EVANS (eds.) 2006. *Catching Language: The Standing Challenge of Grammar-Writing*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- AUSTIN, PETER. 1981. *A Grammar of Diyari*. Cambridge: Cambridge University Press.
- BAUER, WINIFRED (WITH WILLIAM PARKER, & TE KAREONGAWAI EWANS). 1997. *The Reed Reference Grammar of Maori*. Auckland: Reed.
- BRESNAN, JOAN, & SAM A. MCHOMBO. 1987. Topic, pronoun and agreement in Chichewa. *Language* 63. 741–782.
- CRAIG, COLETTE. 2001. Encounters at the brink: linguistic fieldwork among speakers of endangered languages. In *Lectures on Endangered Languages*, ed. by O. Sakiyama, 285–314. Kyoto: ELPR.
- CRISTOFARO, SONIA. 2006. The organization of reference grammars: A typologist user's point of view. In *Catching Language: The Standing Challenge of Grammar-Writing*, ed. by Felix Ameka, Alan Dench, & Nicholas Evans, 137–170. Berlin: Mouton de Gruyter.
- DIXON, R. M. W. 1972. *The Dyirbal Language of North Queensland*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 1977. *A Grammar of Yidj*. Cambridge: Cambridge University Press.

- 2005. *A Semantic Approach to English Grammar*. Oxford: Oxford University Press.
- DONALDSON, TAMSIN. 1980. *Ngiyambaa, the Language of the Wangaaybuwan*. Cambridge: Cambridge University Press.
- EVANS, NICHOLAS. 1995. *A Grammar of Kayardild*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- . 2003a. *Bininj Gun-wok: A Pan-Dialectal Grammar of Mayali, Kunwinjku and Kune*. (2 volumes). Canberra: Pacific Linguistics.
- . 2003b. Typologies of agreement: Some problems from Kayardild. *Transactions of the Philological Society* 101 (2). 203–234.
- , & ALAN DENCH. 2006. Introduction: Catching language. In *Catching Language: The Standing Challenge of Grammar-Writing*, ed. by Felix Ameka, Alan Dench, & Nicholas Evans, 1–39. Berlin: Mouton de Gruyter.
- , & HANS-JURGEN SASSE. 2007. [On-line reprint, slightly revised, of Evans & Sasse 2004]. Searching for meaning in the library of Babel: Field semantics and problems of digital archiving. *Archives and Social Studies: A Journal of Interdisciplinary Research* 1 (0). 260–320. On-line publication available at http://socialstudies.cartagena.es/index.php?option=com_content&task=view&id=38&Itemid=33.
- GABELENTZ, GEORG VON DER. 1891. *Die Sprachwissenschaft. Ihre Aufgaben, Methoden und bisherigen Ergebnisse*. Leipzig: Weigel.
- GIPPERT, JOST, NIKOLAUS P. HIMMELMANN, & ULRIKE MOSEL (eds.) 2006. *Essentials of Language Documentation*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- HALE, KEN. 1982. Some essential features of Warlpiri verbal clauses. In *Papers in Warlpiri Grammar in Honour of Lothar Jagst*, ed. by S. M. Swartz, 217–235. Darwin: Summer Institute of Linguistics.
- . 1997. Remarks on Lardil phonology and morphophology. In *Lardil dictionary*, ed. by Ngakulmungan Kangka Leman, 12–56. Queensland: Mornington Shire Council.
- HASPELMATH, MARTIN. 1993. *A Grammar of Lezgian*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- . 1997. *Indefinite Pronouns*. Oxford: Clarendon Press.
- HEATH, JEFFREY. 1984. *A Functional Grammar of Nunggubuyu*. Canberra: AIAS.
- HILL, JANE H. 2006. Writing culture in grammar in the Americanist tradition. In *Catching Language: The Standing Challenge of Grammar-Writing*, ed. by Felix Ameka, Alan Dench, & Nicholas Evans, 609–628. Berlin: Mouton de Gruyter.
- HIMMELMANN, NIKOLAUS. 1998. Documentary and descriptive linguistics. *Linguistics* 36. 161–195.
- . 2006a. How to miss a paradigm or two: Multifunctional ma- in Tagalog. In *Catching Language: The Standing Challenge of Grammar-Writing*, ed. by Felix Ameka, Alan Dench, & Nicholas Evans, 487–527. Berlin: Mouton de Gruyter.
- . 2006b. Language documentation: What is it and what is it good for? In *Essentials of Language Documentation*, ed. by Jost Gippert, Nikolaus P. Himmelmann, & Ulrike Mosel, 1–30. Berlin: Mouton de Gruyter.
- HUDDLESTON, RODNEY, & GEOFFREY K. PULLUM. 2002. *The Cambridge Grammar of English*. Cambridge: Cambridge University Press.

- KEEN, SANDRA. 1983. Yukulta. In *Handbook of Australian Languages*, ed. by R. M. W. Dixon & Barry J. Blake, volume 3, 190–304. Amsterdam: John Benjamins.
- KRUSPE, NICOLE. 2003. *A Grammar of Semelai*. Cambridge: Cambridge University Press.
- LAUNEY, MICHEL. 1994. *Une grammaire omnipredicative*. Paris: CNRS Editions.
- LEECH, GEOFFREY, & JAN SVARTVIK. 1975. *A Communicative Grammar of English*. London: Longman.
- LICHTENBERK, FRANTISEK. 1983. *A Grammar of Manam*. Honolulu: University of Hawaii Press.
- . 2008. *A Grammar of Toqabaqita (2 vols.)*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- MOSEL, ULRIKE. 2006. Grammaticography: The art and craft of writing grammars. In *Catching Language: The Standing Challenge of Grammar-Writing*, ed. by Felix Ameka, Alan Dench, & Nicholas Evans, 41–68. Berlin: Mouton de Gruyter.
- , & EINAR HOVDHAUGEN. 1992. *Samoan Reference Grammar*. Oslo: Scandinavian University Press.
- NEWMAN, PAUL. 2000. *An Encyclopaedic Grammar of Hausa*. Yale: Yale University Press.
- OSADA, TOSHIKI. 1992. *A Reference Grammar of Mundari*. Tokyo: Institute for the Languages and Cultures of Asia and Africa.
- OSUMI, MIDORI. 1995. *Tinrin grammar*. Honolulu: University of Hawaii Press.
- QUIRK, RANDOLPH, & SYDNEY GREENBAUM. 1973. *A University Grammar of English*. Harlow, Essex: Longman.
- RICE, KEREN. 2005. A typology of good grammars. *Studies in Language* 30 (2). 385–415.
- SHOPEN, TIMOTHY (ed.) 1985 (rev. edn. 2007). *Language Typology and Syntactic Description*. (3 vols). Cambridge: Cambridge University Press.
- SINCLAIR, JOHN (ed.) 2005. *Collins Cobuild English Grammar*. Glasgow, Scotland: Collins.
- SUTTLES, WAYNE. 2004. *Musqueam Reference Grammar*. Vancouver: UBC Press.
- TAMURA, SUZUKO. 2000. *The Ainu Language*. Tokyo: Sanseido.
- THIEBERGER, NICHOLAS. 2007. *A Grammar of South Efate*. Honolulu: University of Hawaii Press.
- VALENTINE, RANDOLPH. 2001. *Nishnaabemwin Reference Grammar*. Toronto: University of Toronto Press.
- VOORT, HEIN VAN DER. 2004. *A Grammar of Kwaza*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- WEBER, DAVID J. 2005. Thoughts on growing a grammar. *Studies in Language* 30 (2). 417–444.
- WEINREICH, URIEL. 1954. Is a structural dialectology possible? *Word* 14. 388–400. Reprinted In *Readings in the Sociology of Language*, ed. by Joshua A. Fishman, 305–319. The Hague: Mouton.
- WHORF, BENJAMIN LEE. 1946. The Hopi Language, Toreva Dialect. In *Linguistic Structures of Native America*, ed. by Harry Hoijer, number 6 in Viking Fund Publications in Anthropology, 158–183. New York: The Viking Fund.
- ZAEFFERER, DIETMAR. 2006. Realizing Humboldt's dream: Cross-linguistic grammatography as data-base creation. In *Catching Language: The Standing Challenge of Grammar-Writing*, ed. by Felix Ameka, Alan Dench, & Nicholas Evans, 113–136. Berlin: Mouton de Gruyter.